

小学校及び中学校の音楽科の授業における アクティブ・ラーニングについての一考察 —音楽を視覚化した映像を用いて—

荒川 恵子
(教育学科教授)

小学校及び中学校の音楽科の授業で重視されている「音楽を形作る要素と音楽を聴いて感じた印象との関係性」を学べる教材として、ディズニー映画『ファンタジア』を用いたアクティブ・ラーニングについて検討した。『ファンタジア』は、数曲の既成のクラシック音楽を映像化したものである。音楽を視覚化したものであるため、音楽の構成に対応した映像がつけられている。特に、チャイコフスキー作曲《くるみ割り人形》から選ばれている6曲は、1曲の分数が短いこともあり、使いやすい教材であるとして、どのような学びが得られるかを考察した。小学校高学年から中学校にかけての、アクティブ・ラーニングの際、グループで1, 2曲を取り上げて、児童、生徒間で、音楽にどのような理由で映像があてられているかを深く考察して探求し、音楽をもとに新たな映像を考える内容を提案した。

キーワード：音楽を形作る要素 アクティブ・ラーニング 音楽を視覚化 『ファンタジア』
《くるみ割り人形》

0. はじめに

近年の学習指導要領の改訂の際、核となったのは、「主体的・対話的で深い学び」である。これは21世紀を「生きる力」を育むには、それまでのような教員による知識の伝授を最重視した、教員から児童、生徒への一方向の授業ではなく、児童、生徒が「自分事」として、学びをとらえることを重視しての教育改革である。自ら課題を探求し、答えのない問いを立てて、その問題を考え抜く思考力の錬磨、同級生と対話する中で、自分が気づかなかったことに気づかされたり、自分と違う価値観に遭遇してそれを受け入れるために、柔軟に意見調整をする、そして結論にたどり着くといった力を育むべきと考えられたのである。いわゆる「アクティブ・ラーニング」が重視されることになった。今回は、音楽科におけるアクティブ・ラーニングについて考えてみたい。

1. 音楽科の授業で重視されているもの

荒川 2023 でも言及したが、音楽科の授業は、

何を教える授業であるかが、長い間、明確でなかったと言えるであろう。それを平成20年の学習指導要領改訂以降「音楽を形作る要素」「音楽の構造」と「曲想」「音楽を聴いて感じた印象」を結び付けて考えることが重視されるようになった。

「音楽がわかる」ということは、微妙な表現の差異に気づくことができるということである。それには、作曲家の芸術上の意図を理解したり、文化に刷り込まれている表現上のルールのようなものを、理解できているということも重要である。それらがわからなくても音楽を楽しむことはできるが、その妙が分かれば、音楽の奥深い魅力を知ることができ、一生深く音楽と関わることができるだろう。「音楽がわかる」ようになることは、いわば生涯の財産を得るようなものである。

平成28年12月21日の中央教育審議会答申「中教審第197号」では、小学校段階では「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、

自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」が重要視された[中央教育審議会2016：161-166]。その結果、小・中・高の「音楽科」の「学習指導要領」において「音楽を形作る要素」「音楽の構造」と「音楽を聴いて感じた印象」を結び付けて考えるという目標が明記されている。前述の「音楽がわかる」ようになる為には、これらは非常に有効な学びであり、これが音楽科における「深い学び」ということになるであろう。

2. 学習指導要領における言い直し

学習指導要領では、小学校1年生から、学ぶべき内容を、段階を追って習得するように書かれている。本章では、学習指導要領に、音楽科で学ぶべきことがどのように記述されているのか、今一度、整理してみることにする。以降の「 」内は、平成29年改定の小学校、中学校の音楽科の学習指導要領の文言であり、下線は、すべて筆者によるものである。

2.1 「知識及び技能」の習得に関する目標における文言

平成29年改訂の小学校音楽科の学習指導要領において、(1) 「知識及び技能」の習得に関する目標については第1学年及び第2学年では、「(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。」第3学年及び第4学年では「(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、表したい音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。」第5学年及び第6学年では、「(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。」とある

「曲想と音楽の構造などとの関わり」が重要キーワードとして挙げられている。第1学年から第4学年までは、それに「気づく」で良いとされているが、第5学年、第6学年になると「理解

する」という文言になっている。つまり、気づいたものが、どのようなものであるかを知的に深く理解する必要があることを示している。

また、音楽表現についても、第1学年、第2学年では「楽しむ」で良いとされていたが、第3学年以降は、「表したい音楽表現」という文言を用いて、「曲想と音楽の構造などのかかわり」を理解し、それを運用し、意図をもって音楽表現を行えるように児童を育てることが目標だてられている。

2.2 「鑑賞」における文言

例えば、「B 鑑賞」では、第1学年及び第2学年では、「イ 曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。」第3学年から第4学年では、「イ 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて気付くこと。」第5学年及び第6学年では、「イ 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解すること。」とある。「曲想」「音楽の構造」はすべてにおいてキーワードである

低学年では「曲想」との関係に「気づくこと」にとどまっていたものが、中学年で「曲想及びその変化」という微妙な違いに「気づくこと」が求められ、高学年になると単に「気づく」ことから「理解すること」へと思考力の深まりを要求している。

中学校の学習指導要領を見ると、中学校第1学年から第3学年までに身につけることとして「(ア)曲や演奏に対する評価とその根拠」「(イ)生活や社会における音楽の意味や役割」「(ウ)音楽表現の共通性や固有性」という文言が挙げられている

ある一定の認知されている評価や、その評価を生む根拠を学ぶということは、前述の、文化に刷り込まれた表現に対する決まりごとを学ぶということであり、共通性、固有性を学ぶということは、理論的に表現をとらえると言うことである。そして、そのために理解することとして全学年に「(ア)曲想と音楽の構造との関わり」を挙げている。学年が上がるにつれて、益々そ

の重要性を増していき、第3学年では、「(イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり」「(ウ) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性」も挙げられている。つまり作品内世界で完結するのではなく、文化や歴史や他芸術という関連領域へ視野を広げて、それらと結びつけて、音楽を大きな連関の中でとらえることを促している。

2.3 「共通事項」における文言

「共通事項」においても、小学校第1学年から第6学年までは「ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。」とある

中学校でも全学年で「ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。」と記載されている

音楽科の授業のゴールは、「音楽を形作っている要素」にまず気づき、その要素同士の関連を知的に理解し、音楽の印象や喚起される情動との関係性に目を向けて、解き明かそうとすることを試みるということになる。つまり「音楽を愛好する」だけではなく、奥深い「音楽がわかる」ように育むには、これらのことが何より重要という見解のもとに書かれているのである。

3. 「映像と音楽」という観点で、アクティブ・ラーニングに取り組む

ここまで、音楽科の授業で最も重要視されていることについて整理した。それを踏まえて本論文では、児童、生徒にとって、なじみやすい「映像音楽」を用いて、「音楽を形づくっている要素」の知覚と感受の関係性について、「主体的・対話的で深い学び」にアプローチできる、アクティブ・ラーニングについて考えてみたい。

音楽だけを聴く鑑賞は、抽象的でつかみどこ

ろがなく苦手と感じる児童、生徒が多い。「映像音楽」を用いれば、興味を持つ可能性が高いと推測する。根本・北原 2025 では、音楽を聴くだけでは、集中力が続かないことから、集中力が持続できるよう、音楽と連動した音楽鑑賞用の映像を作成することに取り組んでいる。検証できたわけではないが、映像と音楽の連動というのは、音楽鑑賞における有効で重要な観点と推測される。

ところで、アクティブ・ラーニングといっても、児童、生徒にすべてを丸投げでは、重要な学びが大きく損なわれると考えている。従って、教師の適切なファシリテーションが必要となってくるであろう。そこで、まずは何でも良いと言うのではなく、学びが得られる題材を指定して、それを用いつつ、楽しく課題にアプローチし、自由にディスカッションなどもできるようにして学ばせたらどうかと考え、ディズニー映画『ファンタジア』を使用することを提案する。

『ファンタジア』については、後に詳述するが、1940年に制作されたもので、既成のクラシック音楽の数作品に、映像がつけられたものである。映像に音楽がつけられたのではなく、音楽に映像がつけられた作品である。

なぜ、「ファンタジア」が、よい教材となりうるかについて説明するために、「映像と音楽の調和」についての理論に関して簡単に言及する。

3.1 「映像と音楽の調和」についての理論

映像と音楽の関係性について、視覚と聴覚のマッチングという観点から多くの研究を行ってきた岩宮眞一郎によると、映像と音楽の関係には、1)構造的調和、2)意味的調和、3)映像と音楽の対位法などがある(岩宮 2011、2019: 590-597)。

「構造的調和」とは、音楽の要素(リズム、音高、密度、強弱など)と、映像の要素(動きのリズム、空間の使用、動きのダイナミズム)を合致させることである。初期ディズニーの映画作品は、音楽のリズムとキャラクターの動きを合わせることで、アニメーションの虚構の世界に現実味を与え、命を吹き込んでいた。「ミッキーマ

ウジング」と言われる手法である。

「意味的調和」とは、映像が表現している喜怒哀楽の心情と、同じ心情を表現する音楽を融合させることで、効果を狙ったものである。例えば、悲しいシーンに短調の音楽、喜びが表現されるシーンに長調の音楽を重ねると、映像の印象が同じベクトルの方向へ、大きく増幅される効果があることを岩宮が様々な実験を行って検証している。

「映像と音楽の対位法」は、黒沢明監督が、映画『酔いどれ天使』ほか、しばしば用いた方法である。悲しいストーリーを表す映像に、あえてカラッと明るい音楽を組み合わせることで、より悲しさを誘うような「意味的調和」とは相反する使い方である。

他にも、キャラクターや心情、風景を一つの音楽で、一対一対応で示す、定番の「ライトモチーフ」や、集中させたいところで無音を使うような方法もある。

3.2 教科書における映像音楽の用いられ方

教育芸術社の中学校1年生の音楽科の教科書では、「音楽とイメージ」というくくりで、映画「ジョーズ」の音楽を聴かせて感想を書かせている。これは意味的調和の観点から、出題していると思われる。その他の使用例として、「ゴジラ」「バック・トゥ・ザ・フューチャー」「ET」「ハリーポッター」の4作品が挙げられている。

この5作品は、すべて特徴的な音楽で、児童・生徒も大いに興味を持つと思われるが、これらよりも、ディズニー映画『ファンタジア』の方が、ほとんどを構造的調和によって製作しているということから、「音楽を形作る要素」との関係性を明確に学びやすいと考えられる。もともとが音楽ありきで作られた作品であり、音楽を視覚化したように、映像がつけられた作品であるので、「音楽を形作る要素」を学ぶには格好の教材であると言っても良いであろう。

4. ディズニー映画「ファンタジア」を教材として用いることについて

ディズニー映画『ファンタジア』は、1940年

に制作されたもので、名曲と言われるクラシック音楽の作品の演奏に、映像がつけられたものである。レオポルド・ストコフスキー(Leopold Antoni Stanislaw Boleslawowicz Stokowski、1882 - 1977)が指揮しているが、彼の姿はシルエットでしか出てこない。シルエットのミッキーマウスと握手するユーモラスなシーンも挿入されている。演奏は、フィラデルフィア管弦楽団である。リマスターされて「ファンタジア2000」というのも出ている。おさめられている楽曲は次のとおりである。

- ・ J.S.バッハ(1685-1750)作曲
《トッカータとフーガ ニ短調》
- ・ P.I.チャイフスキー(1840 - 1893)作曲
《くるみ割り人形》より6曲
- ・ P. デュカ(1865 - 1935)作曲
《魔法使いの弟子》
- ・ I.ストラヴィンスキー(1882 - 197)作曲
《春の祭典》
- ・ L.van ベートーヴェン(1770 - 1827)作曲
《交響曲 第6番 田園》
- ・ A.ボンキエルリ(1834 - 1886)作曲《時の踊り》
- ・ M.ムソルグスキー(1839 - 1881)作曲
《はげ山の一夜》
- ・ F.P.シューベルト(1797 - 182)作曲
《アヴェ・マリア》

前述したように、「ミッキーマウジング」と命名されているくらい、音楽の構造が、映像と合致して作られている。

三沢 2022 で行われているように、小学校低学年の場合は、映像を見て、どこが好きかと伝え合うことでも良いと思うが、小学校中学年以上では、なぜその音に、この映像をつけているのかをディスカッションするのが良いのではないかと思う。そうすれば、「音楽を形作る要素」について深く知ることにつながると思われる。

特に、チャイコフスキーの《くるみわり人形》からの部分が、対象として良いと思われる。〈金平糖の踊り〉、〈中国の踊り〉、〈葦笛の踊り〉、〈アラビアの踊り〉、〈トレパーク〉、〈花のワルツ〉

の順に取りあげられている。いずれも数分の短い作品であるので、児童・生徒が集中力を持続して、視聴することができると思われる。以下、その6曲について、ひとつずつ、どのようなところが学びにつながるかを考察する。

4.1 〈金平糖の踊り〉(約2分50秒)

暗闇の中、前奏4小節を静かに指揮するストコフスキーの後ろ姿と、彼の身体で遮られた赤い光が漏れて、彼の身体の輪郭に沿って少し見えているように見せる演出の映像で始まる。この前奏4小節では、ピンクや黄色の大小の円状の物体が、20ほど塊となって静かに飛来する。続く第5小節目から第12小節目までの8小節間で、そのうちのピンクの塊が、妖精の姿に変身し、旋律、リズムに合わせて動き出す。妖精が魔法のステッキで触れたものは皆、光を発し、命を与えられるかのような設定にしている。同型旋律の続く第20小節目まで、リズム通りに正確に、花に触れていくところが注目点である。チェレスタの煌めく音色で、ミステリアスな雰囲気、拍車がかかり、同時にリズムも際立つ。1拍ごとに、リズムを合わせて、花に魔法のステッキが当てられるシーンは、構造的調和を明確に印象付ける。

またこの間に、バスクラリネットで奏される特徴的な下降音が流れる際、その柔らかい音色と緩やかな動きに呼応するように、妖精の飛ぶ軌跡が柔らかい曲線で描かれ、光って浮き上がるようになっている。それはリピート箇所でも同じで、表現は変わるがバスクラリネットによる下行音が出る度に、妖精の飛ぶ軌跡が色とりどりに緩やかな曲線で描かれ、チェレスタの打つリズム通りに花に妖精のステッキが当てられて、灯りがともされていく。

第21小節目からの中間部で曲想が変わるのに呼応して、タンポポの綿帽子のような姿が浮かび、クローズアップされてから、妖精が様々な花に灯をともし、強い音が周期的に鳴るたびに、それと呼応して花に灯がともされるような映像となっている。第32小節目第3拍目からの32分音符の上行音が連続してあらわれる箇

所以降、色とりどりの妖精が多数現れ、円を描くように舞う。そして第37小節目からまた最初の旋律に戻り、同じような映像が繰り返されるが、音色が冒頭と少し変化しているため、それに呼応するかのように使われる線を太くしている。妖精がステッキをあてて、光がともった花の花粉が蜘蛛の巣に広がるような様子が描かれ、画面一杯に煌めく花粉が広がり、そのまま次の「中国の踊り」に連続する。

妖精が登場して、チェレスタのリズム通りに花に灯をともしたり、バスクラリネットの下行旋律の動きに呼応するような曲線を使っているところを何度も視聴して確認し、同じ旋律でも、音色の変化によって、映像で使う線の太さなどの表現を変えているので、なぜそのように変えているのかや、この映像は音楽を的確に表現しているのかと、音楽と映像を、タイミングも含めて覚えるくらい視聴して分析すると、「音楽を形づくっている要素」の、視覚化について考えることとなり、その理解が進むと思われる。

4.2 〈中国の踊り〉(約1分)

原曲はお茶の精の曲である。前出の妖精が巻いた花粉を思わせる、光の煌めいた画面の中から、キノコの集団が浮かび上がる。4つの大キノコ、2つの中キノコの6つのキノコに囲まれて、中央に小キノコが1つという構成である。笠をかぶった中国の親子のように描かれ、ユーモラスな演出がされている。ファゴットで奏される冒頭の2小節間は、キノコの屈伸運動を思わせる動きがなされる。笠には水滴が光る。

フルートとピッコロによる主旋律が第3小節目から始まると、第4小節目までの主旋律の前半で、笠に着いた露を完全にふり落とす動作が描かれ、その後、第5、第6小節目の主旋律の後半で、大中キノコがお辞儀をしているかのように笠を揺らしながら円周上を動いていき、その傍らを小キノコがユーモラスについていく様子が描かれる。反復されるが、同じように、曲想の違いに呼応するように、主旋律の前半2小節は上下運動、後半2小節は円周を歩行というように微妙に異なる動きをあてている。

その後、第11小節目で曲想が変わる際、大中キノコが、2列に並び、お辞儀しあったり、列を入れ替わったりし、その間を小キノコが歩いて行き、これまでとは異なり、画面を縦に使うと言う、空間の使い方をする。そして徐々に複雑な動きになっていく。最後は、一列に歩いて円になり、いったん輪からはみ出た小キノコもその中央に無事位置づけられる。

ここでは終始一貫してキノコの足の動作を、音楽のリズムに合致して動かしているところが注目点である。まずそれを理解し、次に、旋律の微妙な差異に合わせて、キノコの動きが同パターンの反復ではなく、様々に移り変わっていく様子を理解することである。キノコの動きの微妙な差は、「音楽を形作る要素」の何に起因しているかを、ディスカッションするのが良いであろう。

4.3 〈葦笛の踊り〉（約2分）

原曲はフランスのアーモンド菓子の精による踊りである。ピンクや橙の花が空から降ってくるのが、水面に映る様子が描かれる。主旋律である第3小節目から第10小節目では、ピンクの花が空から降って来て水面をゆっくり回転し、主旋律の反復である第11小節目から第18小節目では、橙の花が空から降ってきて同じように水面で回転する。動きが同じなのは反復であるからであると思われるが、花の色を変えているところが緻密である。旋律はフルート3本で柔らかい音色で演奏される。

第19小節から曲想が変わると、白い花が、ゆっくりと舞うように第26小節目まで8小節間をかけて落ちて来る。第27小節目から、主旋律の反復となるが、今度は、水面に浮かぶ花たちが、あたかもドレスを着用する女性のような姿となる。スカートを緩やかに広げるように優雅な動きを見せ、白い花を中心にして、これまで登場したピンクや橙の花に、青い花の一群も加わり、皆で優雅に回旋する群舞を見せ、その動きが広がっていく。

第43小節目から第61小節目までは、18分音符連打となることに呼応して、中央の白い花

が、スカートのドレープが美しく見えるような、スピーディな回転をする。最初、ソロで踊っているように見せて、徐々に他の色の花も加わり、大きく盛り上がり、画面の裾へと消えていく。

第62小節目から、主旋律に戻るが、花が徐々に、身を投げるかのように水の中へと消えていき、最後に中央にいた主役だった白い花も突然、印象的なシンバルの音とともに、滝に落ちるようにして終わりを迎える。

花の踊りのパターンがいろいろ出てくるが、同じ旋律であっても微妙に舞踊のパターンを変えている。また曲想が違ったり、リズムが違ったりと明らかに舞踊のパターンを変えているので、「音楽を形作る要素」のどのような差異が反映されているかをディスカッションするのが良いであろう。

4.4 〈アラビアの踊り〉（約3分）

原曲はコーヒーの精の踊りを表現している。ミュートをかけた弦楽器が持続的に奏され、その上に、イングリッシュホルンやコールアングレが、アラビア旋法風の上下行の音を繰り返して、アンニュイで東洋的な雰囲気醸し出している。音に合わせて、ゆっくりとした動きで、アラビアの女性風の、切れ長の艶っぽい目をした尾の長い、金魚のような魚が、海の中を優雅に泳いでいる映像が流れる。長い尾が、金魚の遊泳の軌跡のラインをずっと描き、最後は、アラベスクを想起させる模様を紅色の魚たちが形作るようになっている。低音で蠢くような音と金魚の動きがマッチしている。

アラビア風の音の緩やかな上下行に合わせて、金魚の遊泳のたゆたいが描かれているが、音によって微妙に動きを変えている。また、5連符が何度も出てくるが、その度、金魚の尾の動きを、一瞬素早くして、あぶくをたくさん出している。そのような動きの差が、「音楽を形作る要素」とどのように結びついているかを考えたら良いし、他の曲との曲想の違いを大いに感じる事ができれば良いと考える。

4.5 〈トレパーク〉約1分

原曲は、ロシアの半農半牧の騎馬隊であるコサックの踊りである。ロシアのコサックの民族衣装を思わせる花のような形をした植物が多く出てくる。ピンク、赤、朱、橙などの植物の軍団が、冒頭からの主旋律に合わせて、腕や足に見える葉を伸縮させてコサックダンスを踊る。この際、リズム通りに動き、メリハリをつけている。

第 33 小節目から第 48 小節目の副旋律では、灰色、黄、青、ピンクの、民族衣装を着た女性に見える植物が出てきて、音楽の変化に伴い緩やかに動く。

第 49 小節目から第 56 小節目で、AC の短 3 度が畳み込まれるように奏されるたびに、新しい花が投げ入れられ画面に変化を与える。

そして第 1 主題の旋律に戻るが、今度は男女ペアに見える花の組み合わせができて、群舞で、回旋した後、突然、ドラマティックに休止して、枯れたような姿を映して終わる。

これは音楽の構造に合わせて、踊りが細かく変化していくので、まずそれを理解することが重要である。末尾の表 1 に、「授業で用いるシーートの一例 〈トレパーク〉の場合」として、全体の映像と音楽の構造について詳述している。踊りの変化は「音楽を形作る要素」の何に起因しているかを徹底的にディスカッションするのが良いであろう。

4.6 〈花のワルツ〉(約 4 分 50 秒)

最初の〈金平糖の踊り〉で出てきた妖精たちが画面に再度現れる。6 曲は、一つの物語として構成されているようである。

他の作品に比べると長いので、一部だけを使うのでも良いかもしれない。ここでは簡単に考察しておく。

尚、この作品については、原曲からの省略が多いので、小節番号は、全音楽譜出版社から出版されたチャイコフスキー作曲『組曲 〈くるみ割り人形〉』のミニチュアスコアの節番号を用いることとする。

ハーブによる導入部分が多いが、妖精は、羽を広げてゆっくり登場し、第 38 小節目の主旋

律が始まってからは音の隆起に呼応するように軌跡を描いて、画面いっぱいに飛翔する。

続く第 45 小節目から第 53 小節目までの曲想が変わる部分では、紅葉のような赤い葉が何枚も出て来て、緩やかな音に呼応して、ゆっくりと空中を舞う。

第 54 小節目から第 69 小節目までは、主旋律の反復となるが、紅葉に妖精が加わり、一緒に舞う。

第 70 小節目から第 101 小節目までは、曲想が変化するのに呼応して、紅葉と一緒に、黄色の銀杏のような葉がたくさん出て来て、紅葉の葉の舞とは異なる様相を見せる。16 分音符 5 つの、音の密度が高い箇所では、煌めくような音色に呼応して、リズム通りに銀杏の葉を光らせている。

やがて、花粉のようにも思える妖精が、白いドレス姿のようになり加わる。音の動きに呼応した動きが終始見られ、第 164 小節目からは短調になるが、厳しい寒さを表しているのか、紅葉も銀杏も、抗っても急速に下降して行くように見せている。そして、第 218 小節目から、また主旋律になるが、雪の結晶が出てきて、曲の終了とともに、ストコフスキーの後ろ姿が、冒頭と同じように出て来て、暗闇の中に消える。

終始、曲想の変化に応じて、別の動きがつけられている。それぞれの動きが「音楽を形作る要素」の何に起因し、それはどのような印象を生んでいるかをディスカッションすれば良いであろう。

5.総合考察－『ファンタジア』を用いたアクティブ・ラーニングについて

前章で記述したように、《くるみ割り人形》からの 6 曲は、時間が短いこともあり、良い教材である。4, 5 人のグループにわかれて、取り組めば良いが、6 曲すべてにあたるのは時間が足りないのでは、1 グループ 1~2 曲だけで良いと思われる。発表の時間をもうけて、それぞれが自分のグループで扱わなかった分にも触れられるようにすれば良いであろう。小学校高学年以降から、中学校が適当な内容ではないかと思わ

れる。

何度でも、どこからでも聴けるようにしておいて、なぜ、各部分の音楽に、その映像をあてているのかを、じっくり徹底的に考えて、ディスカッションし、プレゼン資料を作るのが良いであろう。『ファンタジア』は、音楽を視覚化した映像なので、映像からリズムについてや、映像の変化によって、音楽の構造、調の変化、フレーズの特徴を把握できることであろう。

教員の側は、表1のようなシートから、空白部を作ったシートを用意して、何分何秒目にどのような映像があり、それはどのような音楽につけられているか記入できるようにして、児童生徒に意識させるのが極めて効果的であると思われる。

例えば、〈トレパーク〉の場合、冒頭4小節の主旋律の音が何度も出てくる。4小節の内、前半2小節と後半2小節ずつは、少し違う音楽的要素を持っている。それに合わせて、4小節間、同じ花のキャラクターが舞踊しているようにしているが、その動きを前半2小節と後半2小節では、傾向の違うものにしていく。しかし前半2小節、後半2小節それぞれは同じ傾向の舞踊をしている。そして、この4小節が2回繰り返されてひとまとまりとなっているので、別の色の花の組み合わせを出現させるが、同じ動きをつけていく。このように微細な部分まで観察すると、実によく考えて映像が作られていることが分かる素材なのである。

1時限目は、発表しあうところまでで時間がいっぱいになると思われる。時間が取れるのであれば、2時限目では、『ファンタジア』を題材に、自由に問いを立てて、プレゼンテーションを行い、3時限目では、『くるみ割り人形』についてグループで取り扱った他の曲、もしくはその他の曲でも良いので、音楽に映像をあてることを考えてみるのも良いであろう。映像が難しければ、身体表現をつける、音に合わせて指揮のように腕を動かすなどでも同じような効果が得られると思われる。その場合、リトミックの「音楽のエネルギーを身体で表現する」というコンセプトと重なることであろう。

音楽に映像をつけることは、1分間でも長いくらいかもしれないので、一部分で良いと思われる。発表のスタイルは、絵コンテでも、技術があればパワーポイントなどを使うのも良いだろう。

『ファンタジア』には『くるみ割り人形』以外にも数曲入っているので、分数は長くなるが、それらを視聴して考えたことを発表し合うのも良いかもしれない。

例えば、〈魔法使いの弟子〉は、児童、生徒の間でも良く知られていると思われる。ミッキーマウスと箒の歩行の動きが、音楽のリズムと合致している。冒頭の緩やかな音楽を、魔法使いの師匠が呪文を唱えている映像と重ねたり、中間部の曲想が変わったり、速度が変わるところは、水があふれたり、箒が折れて、逆襲に出るなどの映像を重ねており、音楽の構造が理解しやすいと思われる。

〈時の踊り〉も、曲想の変化に応じて、優雅に踊るフラミンゴ、ユーモラスなカバの舞踊、邪悪なワニの登場など移り変わり、音楽の構成を見事に表しているため、理解しやすい良い教材である。

音楽科の授業で最重要事項にあげられている「音楽を形作る要素」の知覚及び音楽の感受との関係性を学ぶのに、『ファンタジア』は、極めて有意義な教材であると言えるだろう。

引用文献

- ・荒川恵子 2023「小学校及び中学校の音楽科教育方法論に関する一考察：音楽の本質を伝えられる西洋音楽の鑑賞指導をめざして」『京都女子大学発達教育学部紀要』第19号 pp. 129-140.
- ・根本勢也・北原鉄朗 2025「音楽と映像の連動によるVR音楽鑑賞の初期検討」情報処理学会編『エンタテインメントコンピューティングシンポジウム2025論文集』pp.279-281.
- ・三沢 大樹 2022「小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働授業の実践：第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の報告」『教育研究実践報告誌』第5巻第2号 pp.11-18.

・岩宮 眞一郎(2019)「映像メディアに活かす
(((音)))のチカラ」『日本音響学会誌』 第75
巻第10号 pp. 590-597.

【楽譜】

・チャイコフスキー 2024 《組曲 くるみ割
り人形》作品71a 全音楽譜出版社

【DVD】

・ディズニー『ファンタジア』1940年制作
・教育芸術社2025『中学生の音楽1』（指導者
用デジタル教科書 教材）

【URL】

・中央教育審議会 2016「幼稚園、小学校、中
学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要
領等の改善及び必要な方策等について（答申）
（中教審第197号）」

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf 2025年12月20日閲覧)

・文部科学省 2017 小学校学習指導要領
(平成29年告示)解説 音楽編
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf 2025年12月20日閲覧)

・文部科学省 2017 中学校学習指導要領
(平成29年告示)解説 音楽編
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_006.pdf 2025年12月20日閲覧)

【謝辞】

論文執筆にあたり、有益なご助言を頂きました
京都女子大学教授 関口博子氏、古池若葉氏、
森久佳氏に深く感謝申し上げます。

表1 授業で用いるシートの一例 〈トレパーク〉の場合

時間	映像(一部白紙にして記入させる)	音楽(一部白紙にして記入させる)
① 20:30-35	ピンクの花6つがクローズアップされる。	
② 20:35-41	ピンクの花がジャンプして動き出し、コサックの男性を思わせる。2回ジャンプした後、腕のように見える葉が円を描いて4回屈伸運動をする。	第1小節目～第8小節目 主旋律 前半は2小節ずつ同型旋律、後半2小節は音の密度が高まる。A 8小節
③ 20:41-20:47	赤い花が加わり、ジャンプするが、先ほどのピンクの花ではしなかった回転を入れながらジャンプをし、腕に見える葉も先ほどとは少し違う、交互に動くそぶりを見せる。	第9小節目～第16小節目 主旋律派生 A' 8小節
④ 20:47-20:53	橙の花が加わり、最初のピンクの花と同じ2回ジャンプと4回屈伸運動をする。	第17小節目～第24小節目 主旋律冒頭に戻る A 8小節
⑤ 20:53-20:59	山吹色の花が加わり、2番目のピンクの花と同じ動きをする	第25小節目～32小節目 主旋律派生 A' 8小節
⑥ 20:59-21:05	民族衣装を着た女性を思わせる灰色の花が横揺れしながら歩行して来て、黄色の花も加わり同じように歩行し、腕組しているように見せている	第33小節目～第40小節目 趣の異なる副旋律 前半は2小節ずつ同型旋律、後半2小節は音の密度が高まる。B 8小節
⑦ 21:05-21:11	前の区分と同じような形の青い花とピンクの花が、全く前の区分と同じ動作をしている	第41小節目～48小節目 副旋律派生 B' 8小節
⑧ 21:11-21:17	A-Cの短3度上行音のC音のリズムに合わせて、黄、赤、橙、ピンク、青、灰と花がどんどん投げ入れられるように飛んでくる。だんだん短3度出現の間隔が狭くなるので、畳みかけるように見える映像である。	第49小節目～第56小節目 A-Cの短3度上行音が強調され、徐々にその合間が短くなり、急ぎ立てられるように連続して鳴る。8小節
⑨ 21:17-21:23	男女のペアに見立てられる花がペアを組み、あちらこちらで手をつないで回転している。	第57小節目～第64小節目 主旋律に戻る A 8小節
⑩ 21:23-21:30	ペアの回転が続く。	第65小節目～第72小節目 主旋律派生 A' 8小節
⑪ 21:30-21:37	ペアの回転がますます激しくなり最後に劇的に止まった時には、花が全部枯れているかのような映像となる。	第73小節目～第84小節目 コーダ 12小節 最後はブチッと音が切れるように止まる。